The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	看護基礎教育におけるEnd-of-Life ケアシミュレーションの開発と評価：無作為化比較試験による検討
Author(s)	玉木, 朋子
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/72302
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　玉　木　朋　子　　）	
論文題名	看護基礎教育におけるEnd-of-Life ケアシミュレーションの開発と評価：無作為化比較試験による検討

論文内容の要旨

【研究背景】

End-of-life(EOL)ケアは複雑で柔軟かつ慎重な対応が必要とされるため、看護学生はEOLステージにある患者を臨地実習で受け持つ機会が限られており、EOLケアを経験的に学習する機会が少ない。文部科学省、厚生労働省ともに、看護基礎教育でのEOLケアに関する能力の確実な育成を強調しており、2011年には「模擬患者を導入した演習により体験的に学ぶこと」や「シミュレーション等の活用により学内での演習で補完すること」が明示され、看護学生がEOLケアを経験的に学習するための教育的な工夫の必要性が提唱された。これ以降、シミュレーション教育が看護基礎教育に顕著に活用されるようになってきた。しかし，EOLケアに関してシミュレーション教育を活用し教育効果を検証した研究や、模擬患者を使って看護学生にEOLケアを体験的に習得することを目的とした先行研究は少なく、これまでに無作為化比較試験でその教育効果について検討された研究はない。

【研究目的】

看護学生がEOLケアを体験的に学習できるよう、模擬患者を使ったEOLケアシミュレーション教育のシナリオの開発をおこなった。研究1では、EOLステージにある患者のケアというシビアな状況設定下でも学生が興味をもち、集中して学習できるシナリオを目指し、「フロー体験」の生成に着目してシナリオの評価をおこなった。フロー体験は「挑戦水準と能力水準が平均より高い状態で釣り合うこと」「明瞭な目標が設定され、現在していることへの即時のフィードバックを受けることができること」が生成の前提条件となっている。開発したEOLケアシミュレーションに参加することで学生のフロー体験の生成に寄与するかを検証し、その前提条件である情報内容、量的バランス、挑戦水準が適切か、目標設定が明瞭で即時のフォードバックを得ることが可能であったかどうかを評価した。

研究2では開発したEOLケアシミュレーションの教育効果を知識、技術、自信の獲得のアウトカム指標で評価し、教育実践への適応可能性を検討した。

【研究1：看護基礎教育におけるEnd-of-Lifeケアシミュレーションシナリオの開発：フロー体験チェックリストを用いた無作為化比較試験による検討】

1. 目的：模擬患者を使ったEOLケアシミュレーションシナリオを開発し、EOLケアシミュレーションへの参加による学生のフロー体験の生成と、EOLケアに対する自信を測定することで開発したシナリオを評価することを目的とした。

2. 方法：2015年度，EOLケアシミュレーションシナリオの開発を完了した。同年、EOLケアシミュレーションへの参加希望を募り、参加希望のあった学生を教育群（n = 13）と対照群（n= 12）の2群に無作為に割り付けた。教育群にEOLケアシミュレーション教育を実施し、ベースラインと教育群へのEOLケアシミュレーション後の両群の2時点間のフロー体験の生成とEOLケアに対する自信の変化を無作為化比較試験により評価した。
3. 結果：EOLケアシミュレーションへの参加後、教育群のフロー体験のスコアが有意に高値を示した。EOLケアに対する自信は教育群で有意に上昇した。

【研究2：看護基礎教育におけるEOLケアシミュレーションの教育効果の評価：無作為化比較試験による検討】

1. 目的：研究2では研究1で開発したEOLケアシミュレーションの教育効果を無作為化比較試験により知識、技術、自信のスコアの変化により評価することを目的とした。
2. 方法：2015年度から2016年度にかけてEOLケアシミュレーションに参加希望のあった学生を教育群と対照群の2群に無作為に割り付けた。教育群と対照群の知識、客観的技能評価試験（OSCE）による技術試験、自信の変化を比較することで教育効果を検討した。また、効果量を算出し、EOLケアシミュレーション教育の教育効果について検討した。
3. 結果：38名（教育群20名、対照群18名）の学生がEOLケアシミュレーションに参加した。教育群は対照群と比べ、EOLケアにおける知識（$p = 0.000$）、技術（$p = 0.000$）、自信（$p = 0.000$）のすべての項目において有意な得点の上昇を認めた。また、EOLケアに関する知識の獲得、技術の獲得、自信の獲得のすべてにおいてEOLケアシミュレーションの効果量が大きいことを示した。

【まとめ】

開発したEOLケアシミュレーションシナリオは学生にとって集中し、かつ興味を持ちながら学習できる機会を提供することができ、その情報内容、量的バランス、挑戦水準が適切であることが示唆された。さらに、EOLケアシミュレーション教育に参加することでEOLケアに関する知識、技術、自信の獲得につながることが明らかとなった。模擬患者を使ったEOLケアシミュレーション教育は、看護学生が臨地実習で経験することが困難なEOLケアを看護基礎教育において体験的に習得するための効果的な学習手段となると期待できる。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　玉木　朋子　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	大野　ゆう子
	副 査	教授	井上　智子
	副 査	教授	神出　計

論文審査の結果の要旨

End-of-life(EOL)ケアは、複雑で柔軟かつ慎重な対応が必要とされるため、看護学生はEOLステージにある患者を臨地実習で受け持つ機会が限られている状況にある。一方、文部科学省、厚生労働省ともに、看護基礎教育でのEOLケアに関する能力の確実な育成を強調しており、2011年には模擬患者を導入した演習やシミュレーション等の活用による学内演習による補完学習を明示し、以降、シミュレーション教育の導入が盛んになっている。しかし、EOLケアに関するシミュレーション教育に関する検討は少なく、教育効果について無作為化比較試験により検討した研究はない。本研究では、模擬患者を使った看護大学生に対する看護基礎教育におけるEnd-of-Lifeケアシミュレーションシナリオの開発を行い、教育効果について無作為化比較試験により検討を行った。

EOLケアシミュレーションシナリオにおいて、解決すべき課題は文部科学省の卒業時到達目標から直接的な患者ケア項目を抽出・設定し、さらに看護者として患者の心情を踏まえた態度がとれること、看護提供できることを目標とした。模擬患者の設定、教育シナリオ構築【（５分間の学生ケア＋教員による意図的なCueと７分間のデブリーフィング）の５セット】を行い、教育群にはプログラム参加による学生のフロー体験の生成と、EOLケアに対する自信を測定することで開発したシナリオの評価を行った。教育群と対照群の2群に無作為に割り付け、教育群にEOLケアシミュレーション教育を実施し、ベースラインと教育群へのEOLケアシミュレーション後の両群の2時点間のフロー体験の生成とEOLケアに対する自信の変化を評価した結果、EOLケアに対する自信は教育群で有意に上昇するなど、開発したEOLケアシナリオは学生の能力に適合した量的・挑戦水準であり、明確な目標が設定されて即座のフィードバックを得ることのできる機会の提供となったことが示された。

さらに開発したEOLケアシミュレーションの教育効果を無作為化比較試験により知識、客観的技能評価試験（OSCE）による技術試験、ケアに対する自信スコアの変化について、参加希望のあった学生を教育群と対照群の2群に無作為に割り付け評価した。その結果、38名（教育群20名、対照群18名）の学生がEOLケアシミュレーションに参加し、教育群は対照群と比べすべての項目で有意な得点の上昇を認め、効果量が大きいことが示され、開発したEOLケアシミュレーションシナリオは学生にとって興味を持ちながら学習できる機会を提供することができ、その情報内容、量的バランス、挑戦水準が適切であることが示唆された。

本研究は臨地実習で学習困難なEOLケアを看護学生が学習する効果的なシミュレーションシナリオを開発、評価するとともに、知識、技術の獲得の視点から教育効果の評価を検討したものである。今後の看護基礎教育におけるEOLケアに関する教育への新たな知見であるとともにEOL以外の実体験が困難な領域における教育方法として発展が期待できる。シナリオ作成の方法論および教育効果の評価に関する方法論は学術的にも社会的にも貢献できるものと考える。

以上より、本論文は博士（保健学）の学位授与に値するものと考える。